

## 武藏野日曜集会

## 主キリストの愛

——ヨハネ伝第13章1～15節——

小池辰雄

極みまで愛する 天来書 賣いの関係 絶対無条件の恵み 決定的な関わり

## 【ヨハネ13・1～15】

<sup>1</sup>過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己<sup>2</sup>が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極まで之を愛し給えり。<sup>2</sup>夕餐のとき惡魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思いを入れたるが、<sup>3</sup>イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしこと、己の神より出でて神に到ることを知り、<sup>4</sup>夕餐より起<sup>5</sup>ちて上衣をぬぎ、手巾<sup>6</sup>をとりて腰にまとい、<sup>5</sup>ついで盤<sup>7</sup>に水をいれて、弟子たちの足をあらい、纏<sup>8</sup>いたる手巾にて之を拭<sup>9</sup>いはじめ給う。斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』<sup>7</sup>イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』<sup>8</sup>ペテロ言う『永遠に我が足をあらい給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わば、汝われと関係なし』<sup>9</sup>シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭<sup>10</sup>をも』<sup>10</sup>イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉<sup>11</sup>とくは然らず』<sup>11</sup>これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』<sup>12</sup>と言い給いしなり。

<sup>12</sup>彼らの足をあらい、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか』<sup>13</sup>なんじら我を師また主ととなう、然か言うは宜なり、我は是なり。<sup>14</sup>我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。<sup>15</sup>われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく、汝らも為さんためなり。

## ●極みまで愛する

<sup>1</sup>過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己<sup>2</sup>が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極まで之を愛し給えり。  
「過越」<sup>すぎこし</sup>というのはあの出エジプトのことです。イスラエルの民は罰せられないで過ぎ越



されたから、「過越」という。キリストは、自分が十字架で処刑されて犠牲の死を、贖罪の死を遂げて、父のもとへ行くことはもうあらかじめ御存知です。それがこの

「イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り」

ということです。「己の者」とはイエスの本当の弟子ということ。それを愛して極みまで愛した。キリストの愛が、顧みの愛がその弟子たちに伝わる。即ちキリストの愛が、愛の生命が入つてくるわけです。キリストみたいなかたは相手を愛すると、その愛の生命が相手の中に入るわけです。単なる感情の愛ではない。

「己が生命を捨てる」

とは、

「相手に生命を与える」

ということです。そして、それは今度は靈的な生命として生きるわけです。これはパウロもコリント前書15章等で言つて いるとおりです。

「極みまで愛する」

とは、

「徹底的にそれに愛の生命を与える」

ということです。

「<sup>2</sup>夕餐<sup>ゆうけん</sup>のとき惡魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思いを入れたるが、

「惡魔」というやつは、旧約からあるけれども、旧約でも新約でも非常に傲慢な靈で神に逆らう。逆らうけれども決して勝てない。我々は惡魔と自分で戦つてはダメです。神・キリストの中に自分を投げ込む。そうすると、惡魔に勝てる。これは我々の戦いの秘訣です。

「自分の信仰があつくなつたから」

なんて思つて、自力でやろうとしたらダメです。本当の他力なんです。こちらは無力です。

イエス・キリスト自身が他力なんです。

「われ何事をも為しあたわず」

と仰つた。キリストは父が一切なので、

「自分は何でもない。何も教えているのではない。父なる神が言えということを言つたり、為せ<sup>な</sup>ということをさせられているだけだ」

と仰つた。だから、私は「無」ということを言つわけです。無意、無力ということ。自分の意志がない、自分の力もない。キリストが徹底的にこれをやつた。そうすると、神さまの意志と力が入つてくる。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた。自分が何者でもないという人が「私を見た者は父を見た」と。だから、

「我を見し者はキリストを見しなり」



と、我々が言えなくてはいけないわけです。  
「わがうちなるキリストが見えないか」

と。どうせ我々は相対的な罪びとにすぎませんから、それをどんなにいわゆる自力的に修行したって、たかがしれている。そんなものは問題にしない。

キリストはこのしようがない者の中に入つてくださる。キリストの愛というのは力があふれている、力ある愛です。我々を贖い活かすところの愛ですから。普通の人間の愛とはちがう。我々は一人一人が、今もなお靈界に在りたもうところのキリストに極みまで愛されている。一人一人を愛するキリストの愛し方というのは、その方法はみな違う。十把一絡じっぽひとからげではない。その人らしくキリストは顧みてくださっている。

ゲーテの『ファウスト』の中に出でてくる「メフィストーフエレス」というのが悪魔の出店みたいなやつですけれども、結局、メフィストーフエレスはしまいには降参するわけです。

### ●天来書

私は内村鑑三、藤井武の無教会の集会に出でいましたが、無教会では

#### 「十字架、十字架」

と言つてはいるばかりで、聖靈の世界がさっぱり出てこない。無教会のそれまでの信仰は、全く「観念」だとは言いませんけれども、非常に觀念が強い。本当の意味で、御靈の力ではなかつた。これが無教会のそれまでの歴史の限界だつた。これでは聖書は本当に読めてはいなかつたことがよく分かつた。

エホバの力、キリストの力がこの聖書の中に隠れている。聖書の文字を読みながら、その靈的な力を受け取らなかつたら、読んでいるということにならない。意味ではない。そういうつた実体なんです。人間が考えだして作つたどんな本も、聖書一巻にはかなわない。これは天来の声、天来の力であるから、天来書なんだ。

<sup>3</sup>イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしこと、己の神より出でて神に到ることとを知り、

神より出でて神に至る。イエスは十字架の贖罪をとおつて、また靈界に入つてしまふ。だから、我々にとつては、十字架のキリストと靈界のキリストは分けるわけにいかない。過去・現在・未来の私は十字架でもう贖いとられている。そして、そこには聖靈の力がやつてくる。「私の信仰」なんていうものではない。だから私は、

「信仰なんかありません、何もありません。無です」

と言う。そうすると、無限無量なものが入つてくる。十字架で無とされている。無を与えてはいる。罪からはずされている。自我を乗り越えている。超我なんだ。我を、自己を超えて乗り越えてしまう。

讃美歌でよく、



「…したまわん」

とあるが、あれは

「…したもう」

と歌わなければダメです。必ずキリストはそうなさるから、「…したもう」と歌つた方が力がくる。

「そうして、くださいでしょ、」

ではない。

「必ずそうして、くださいます」

ということ。本当の現実は現在直説法の世界なんです。断定しなければ力が来ない。未来のことであろうとも、全部これは現在化して言わなければダメです。

「神の国は来る、であろう」

ではない。

「神の国は必ず来る」

です。私はそれでなければ力がこないから仕方がない。

### ● 贖いの関係

4 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとい、5ついで盤に水をいれて、弟子たちの足をあらい、纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。<sup>6</sup>斯てシモン・ペテロに至り給え、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』<sup>7</sup>イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』<sup>8</sup>ペテロ言う『永遠に我が足をあらい給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わづば、汝われと関係なし』

「足を洗う」とは、罪を全部消してしまうこと、「罪を贖う」ことをキリストは意味しておられた。だから、

「我もし汝を洗わづば、汝われと関係なし」

と言われた。キリストと私の関わりは、キリストが贖つてくださるという関係なんです。なんていう事柄を信じたつてどうにもならない。

「キリストは神の子である」

なんていう靈的現実で私はものを言う。そうすると、

「同じ内容だけれども、小池先生が言うと違う」

なんて言われる。私はその現実からものを言つてはいるから、それは響きが違う。語りながら、

その現実から語るのでなかつたら、私は空しい。だから、いわゆるお説教でも説明でもない。

「我もし汝を洗わづば、汝われと関係なし」

という、キリストのこの言葉は強い。



「お前を全部贖つてやるから、贖いの関係だ。先生と弟子の関係ではないんだ」と。実に、このキリストの断然たる言葉は読んでいて力がくる。

自分で聖書に食いついてくださいよ。天来の力、天来の光、天来の生命、これを受けとらなかつたら空しい。私は空しいことは嫌いだ。空しいことは要らないんだ。

「小池先生は90歳を越えて、なぜあんなに元気なのか。あれは水泳をやつているからだ」

なんて、そうではない。水泳をやつたり、自転車を乗り回したりしているからではない。それは一つの派生にすぎない。私はキリストの力に圧倒されて生きている。天来の力に圧倒されて生きているので、信仰でも何でもありません。

「自分の信仰がどうだこうだ」

なんて、そんなことを考えてません。キリストの力に圧倒されて、それで何でもできるし、人助けもできるし、あんしゅ按手すれば病気が治つたりする。だから、「信仰」なんていう言葉は嫌いだ。ありきたりの概念を乗り越えなければダメですよ。

「我もし汝を洗わば、汝われと関係なし」

と。これはペテロに言つているのではなくて、私にキリストがそう言つてらつしやる。

「お前を洗つてやつている。贖罪してしまつている。そして、新しい靈的な生命を与えるから」

と。これがキリストの関わりなんだ。もう、平伏して、

「ありがとうございます」

の他には言ひようがない。

### ●絶対無条件の恵み

<sup>9</sup>シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭かぶをも』<sup>10</sup>イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉いよいよとくは然らば』<sup>11</sup>これ己かれを売る者の誰なるを知りたもう故に『ことこととくは潔からず』と言ひ給いしなり。

<sup>12</sup>彼らの足をあらい、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。<sup>13</sup>なんじら我を師先生また主ととなう、然か言うは宜うべなり、我は是これなり。<sup>14</sup>我は主また師なるに、尚なおなんじらの足を洗いたれば、汝らも互たがいに足を洗うべきなり。<sup>15</sup>われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく、汝らも為さんためなり。

「互たがいに洗いあいなさい」

と。お互いに批評するのではなく、お互いに助け合つていく。

「いいよ、いいよ」



と。人の欠点なんかは見ない。その人の長所を見ていく。プラスの面は見て、マイナスの面は見ない。それが本当の友情だ。

第三者のことをなんのかんの言うのは一番いかん。人間の間を崩していくものは、第三者のことを批評する言葉です。第三者のことを讃めるのはいい。けれども、なんのかんの言うことは人間関係を崩す。言いたければ、面と向かって一対一でものを言つた方がいい。

「ああそうか、それは悪かつたね。いやそれは誤解だよ」

と、何とでもお互に言い合うことができる。第三者のことは言う必要がない。人間関係は、それでなければ本当の意味で続かない。

それは「敬天」がないと、そういうことになる。「敬天」があるから「愛人」となる。敬天という言葉よりもっと大事なのは、天來の力が来るからです。西郷南洲は、中国からきている「景教」に、聖書が東方に伝わつたものの流れに何かで接したのではないかと思われるくらい、福音的なものにぶつかつてゐるらしい。

支那では「天」という言葉は非常に大事な言葉です。これは自然科学的な天ではない。靈界の、靈的な天のことです。「天国」というのは素晴らしい言葉だ。パラダイスです。私たちにはキリストに罪の贖いをして洗つていただいた。だから、これが関係です。キリストの洗いかたは徹底してますから、罪を完全に我々は贖いとられている。

「こっち側がどうであるこうである」

は問題でない。無条件の恵みです、力ある恵みです。そこには無を、我無き世界を、無我の世界をいただいているわけです。キリストだけがここに生きてくださる世界、キリストが中に入つてくださる世界です。我々一人ひとりにキリストは降臨したもう。こっち側のいかんに関わりなし。絶対無条件の恵みだから、平伏して受けるだけです。これは力が来てしようがない。ありがたくてしようがない。

### ●決定的な関わり

太陽の光もキリストの光にはかなわない。ゲーテは亡くなる一週間前に、

「太陽とキリストに私は無条件に感謝する」

と言つた。さすがはゲーテだ。

「キリストは大変なかただ。自然的な人間としては太陽を、靈的な人間としてはキリストを」

と。そんなことを言う文人は、夏目漱石といえども日本にはいない。

「我もし汝を洗わば、汝われと関係なし」

これは大変な言葉です。キリストの関係は、キリストと私たち一人ひとりとの関わりは正にこれなんだ。決定的な関わりです。決定的な関わりです。「であろう」なんていうのではない。正に「なり」の世界です。



ペテロは、キリストとのこの会話をみていると、見当の違つたことを言つてゐる。ペテロといふのはしょっちゅう躊躇つたり転んだりしている。パウロはダマスコ途上でひつくり返されたから、パウロといふのは大変だ。新約聖書の中心は、キリストを除いては、パウロです。ヨハネはまた別の意味で大事な人です。ヨハネはスースとしているが、パウロは非常に電光劇的なんだ。パウロ、ヨハネ、ペテロはそれぞれですけれども、どれがいいわるいと言つてゐるのではない。私は感激性があるものだから、感激すると話が話にならなくなつてしまふがない。

とにかく、大事なのは旧約の預言書と、新約は全部だけれども、特に福音書です。これは単なる書物ではない。ナポレオンがセントヘレナに流されて聖書を読んだときに、

「これは本ではなかつた。生きものだ。聖書は生きものだ、自分は本当にこれに打たれて降参した」

と言つた。さすがはナポレオンだ。彼は英雄だけれども、この聖書には降参した。彼はそこで初めて聖書の世界に入ったわけだ。

とにかく、第一級のものを相手に、楽しく勇ましく進んでいきましょう。

